

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

ラスト・サムライ (THE LAST SAMURAI)

2003年・アメリカ映画・154分

配給/ワーナー・ブラザース映画

2003 (平成15) 年11月23日鑑賞

<先行試写会>

Data

監督: エドワード・ズウィック

出演: トム・クルーズ/渡辺謙/真

田広之/原田真人/小雪

👁️👁️ みどころ

トム・クルーズ主演の大スペクタクル巨編がいよいよ公開。軍事顧問として明治政府に雇われて日本に来たオールグレン大尉は捕らわれの身に。しかし、藩主、勝元盛次との交流の中、この外国人は次第に真のサムライの心を備えていった。架空のストーリーながら十分な説得力をもったドラマ構成と美しく迫力ある映像はお見事。前評判を裏切らない名作だ。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<日本ブーム、サムライブーム>

今年のハリウッド映画は日本モノの巨編が目立つ。その第1は、タランティーノ監督の『キル・ビル』。こちらはチャンバラへの興味と恨みがテーマで、多分にタランティーノ監督の個人的趣味が満ちあふれている。そしてまた、そこで活躍するのは主人公をはじめとして女性ばかり。

『キル・ビル』が西の横綱とすれば、東の横綱は、12月6日から公開される、この『ラスト・サムライ』だ。こちらは男のドラマであり、明治維新が終わり近代国家が成立した直後の激動の時代を背景として、サムライの魂をテーマとして描いたすばらしいエンターテインメント巨編。

主演のトム・クルーズはこの作品のプロモートで2度来日し、積極的かつ精力的な宣伝活動を繰り広げてきた。

<ハリウッドからみた日本とは・・・>

『パール・ハーバー』(2001年)は、あくまでアメリカ側から描いた真珠湾攻撃の物

話だから、ある程度割引しなければならないとしても、日本海軍の中枢部の描き方はそりゃひどかった。何せ、プールにミニチュアの軍艦を浮かべて、尊皇攘夷の旗やのぼりをたてて、屋外で会議を開いていたのだから・・・。

また『シン・レッド・ライン』（1999年）での日本軍のあまりもぶざまな姿も見られないものだった。しかしこの『ラスト・サムライ』は、そういう抵抗感や違和感は少ない。もともと明治天皇が少し軽すぎるかなと思うものの、若くてリーダーシップがあるところなどは逆にいいのかもしれない・・・。また勝元の国の美しさやその配下の武士や農民たちのすばらしさは日本人が見る以上に高く評価されており、サムライの心を喪失した今の日本人からみれば、かえって気恥ずかしい感じがするのではと思うほど・・・。

<主人公たちは>

主人公のネイサン・オールグレン大尉（トム・クルーズ）は、西部開拓史の時代には原住民たちと戦い、また1861～1865年の南北戦争でも大活躍した英雄。しかし戦争が終われば軍人は無用の長物。かつての「名誉」や「勇氣」が行き場を失った今、ネイサン大尉には何ら果たすべき役割が与えられず、失意の中で荒れた生活を送っていた。

そんなネイサンを明治新政府の軍事顧問（アドバイザー）として日本に招いたのは大村（原田真人）。彼は、もはやサムライは不要、そして必要なは組織的に訓練された西洋式の軍隊と考えている合理主義者で、明治天皇にも重宝されている参議。

他方、これに反対し、今なおサムライの心を持ち続けるのはこれも明治天皇の参議となつていく武将の勝元盛次（渡辺謙）。

そして意外なほどスクリーン上に素顔で登場するのが若き明治天皇（中村七之助）。長い間、日本の映画界では天皇陛下を映画のスクリーンに登場させるのはタブーとされていた。日本の連合艦隊がロシアのバルチック艦隊を完膚なきまでにたたきのめした日本海海戦を描いた『日本海大海戦』（1969年）や1945年8月15日の「玉音放送」に至る日本敗戦の長い1日を描いた『日本の一番長い日』（1967年）等では、天皇陛下は直接スクリーンにその顔を見せずに描くのが常だった。しかしこの映画では、若き明治天皇が直接参議の意見を聞き、決済をしていく姿がイキイキと描かれている。

<第1回目の激突は・・・？>

ネイサンは、近代的軍隊の育成におおわらわだが、何せ時間不足。そしてもちろん、明治政府の兵士たちの出身は武士ではなく農民の出身だから根性がすわっていない。一応、基礎訓練を受けていても、いざ実際に人に向けて鉄砲を撃つとなるとビビってしまい、手元が狂うというありさま。いささか頼りない。

しかしそれでも、勝元率いるサムライ騎馬集団との激突の日が近づいてきた。勝元は明治天皇の忠実な部下ではあるものの、サムライの心を喪失させるような急速な近代化に反

対し、大村とことごとく対決していた。もちろんこの2人はこの映画のストーリー上、登場する架空の人物だが、いわば大村は明治政府の内務大臣となった大久保利通、勝元は西郷隆盛（西南戦争）や江藤新平（佐賀の乱）の人物像と重なっている。

1575年の「長篠の戦い」で、織田・徳川連合軍が当時、日本最強といわれていた武田の騎馬武者集団を「鉄砲の三段撃ち」で撃破したお話は有名。それと同じように、この政府軍の鉄砲隊は突進してくる勝元の騎馬集団を一蹴するはずだったが、残念ながら結果は逆。ものすごい騎馬集団の突進力の前に、政府軍の兵士たちは鉄砲を一発撃った後は逃げまどう始末。たちまち戦場は斬り合いの修羅場となった。そうなると強いのは当然サムライ軍団。ひとり奮闘するネイサンも力尽き、遂に勝元軍に捕らえられてしまった。

<ちょっと奇妙な日本語と英語のチャンポン劇>

勝元は、優れた統治能力と優れた武芸の腕前を備えている他、なぜか英語も堪能。これはちょっと常識では考えられないが、まあトム・クルーズを明治政府初期の時代に主役として登場させるための映画のフィクションとしては仕方ないか・・・。

捕らえられたネイサンを勝元は手厚くもてなし、英語で語りかけてきた。

国際的大スターが1つの映画に揃って登場し、スクリーン上で英語と日本語がチャンポンに語られる映画は昔にもあった。それは、三船敏郎、チャールズ・ブロンソン、アラン・ドロンという日米仏の三大スターが出演した『レッド・サン』（1971年）（フランス・イタリア・スペイン合作）。

この映画の舞台は1870年のアメリカ西部。アメリカ西部を日本国の大使一行を乗せた特別列車が進んでいたが、突如、強盗団の襲撃にあい、巨額の金貨と日本国の宝刀を強奪されてしまった。この宝刀を取り戻すべく活躍するのが、三船扮するサムライ黒田と強盗団のボスで仲間の裏切りにあったブロンソン扮するリンクの奇妙なコンビ。そしてその相手は野望に燃えるドロン扮する強盗ゴッチ。ゴッチの後を黒田とリンクの連合軍が迫り、そこで最終決着が・・・。というもので、結構楽しいものだった。しかしこの映画はあくまで追跡劇と決闘シーンが売りモノであり、サムライ魂を外国人に理解させるというところまではとてもいかなかった。

しかし、『ラスト・サムライ』では・・・。

<ネイサンの心に伝わるサムライの心>

この映画では、勝元の治政の立派さ、農民たちの勤勉さと礼儀正しさ、そして武士たちの文武両道の訓練の高度さなど、かつてネイサンがアメリカでは見聞したことがないこれらの姿に次第に惹かれていくところがミソ。もっとも、この勝元が治めている国（藩）がどこなのかは物語上は明示されていない。しかし、近代化の象徴とされる鉄道が敷設される吉野を拠点として反乱がおこされるという設定。だからおおよその想像はつくが、この

映画の理解にはどうでもよいこと。いずれにしても勝元が治める国は美しい自然に恵まれている。そして農民たちは勤勉で心優しく、武士たちは誇り高く、そして武芸に優れている。こんなにも美しく、こんなにもすばらしい人たちが住む国（藩）が日本にあったのかと驚くネイサン。捕虜となって連行された勝元の治める国（藩）でネイサンはカルチャーショックを受けたのだった。

ネイサンの武術の指導にあたるのは氏尾（真田広之）。氏尾は勝元配下の武将だが、いわばもっとも古いタイプのサムライ。当初は、全くかなわなかったものの、ラスト近くでは相打ちになるまでネイサンの武術のレベルは上達していた。また、ネイサンが日本人の心を理解し、サムライとして成長していく過程には、一人の女性が絡んでくる。

それは、たか（小雪）。たかは戦場でその夫をネイサンによって殺されたから、ネイサンは夫の敵になるわけだが、たかは節度をもってネイサンの世話を続けてきた。

そんな中で、少しずつ芽生えてくる愛情……。こんな静かだが、複雑で熱い想いを込めた役柄のたかを演ずる小雪はすばらしい出来。

そしてサムライの心をネイサンが学んだのは何とんでも勝元から。この勝元を渡辺謙がいつものように熱演している。

このようにして、異国の地アメリカから軍事顧問として日本にやってきたネイサンは、次第に「最もサムライらしいサムライ」に成長していくのだった。

<勝元は「参議」だが>

明治維新は徳川旧体制の破壊と近代中央集権国家の建設を目指したものだから、武士たちが「抵抗勢力」となるのは当然。従って、維新成功後は、武士たちは無用の長物となり、廃刀令や櫛髪令が出されたのも当然。

しかし、勝元やその息子の信忠（小山田シン）たちは、サムライの心と形にこだわり、刀や鬘にこだわっていた。

これらすべての国事に最終判断を下すのは明治天皇。1945年の終戦後の新憲法において、天皇は日本国の象徴とされ、一切の国事に関与できないものとされたが、明治憲法下においては、天皇陛下にすべての権力が集中されていたのは当然。従って天皇陛下の「裁可」をあおぐための御前会議その他さまざまなシステムが用意されていた。

そして勝元は参議。勝元は明治天皇に対して直接意見を具申したが、これは受け入れられず、遂に勝元はあの西郷隆盛や江藤新平と同じように、野に下ることになってしまった。そうするとあとは政府の討伐軍が来るのを待つばかり。勝元らの命は今や風前の灯火だ。

<最期の激突は>

最期の激突は、圧倒的な火器と兵力を誇る政府軍VS勝元軍約500名の激突。この時点では、政府軍の火器の能力は更に進歩し、何と1分間に200発を発射する殺りくマシー

ンともいうべき機関銃まで所有していた。これでは勝負の勝敗は最初から見えているというもの。

しかし、美しく最期の戦いを展開しようと考えていた勝元に対して、ネイサンの考え方は多少違っていた。すなわち、アパッチと戦ったアメリカの有名なカスター将軍のように、人数は少なくとも、ひょっとして・・・とあらゆる可能性に賭けて作戦を合理的に考えていたのだった。このネイサンの考え方にはさすがの勝元もびっくり。そして、現実の戦いにおいても、ネイサンの戦略は大成功。政府軍危うし、勝元軍の勝ちか？というところまで迫った。しかし残念・・・。最期は機関銃の威力の前に屈することになったが・・・。

この最期の激突の戦闘シーンは実に迫力がある。そしてその上、美しくも物悲しい大スペクタクルシーンとなっているので絶対見モノだ。

<国（藩）に戻るネイサン>

最期の激突においてもネイサンはまだ死ななかった。そして最期の戦いの報告と切腹して果てた勝元の刀を届けるために生命を賭して明治天皇の前に現れたネイサンに大村もびっくり。

そして「勝元の死にざまを語れ」と指示する明治天皇に対して、ネイサンは「彼の生きざまを語りましょう」と切り返した。

そしてネイサンは1人たかの住む国（藩）へ戻っていった。この二人がこの後どんな生活を送ったのだろうか。それを知る者は誰もいない・・・。

2003（平成15）年11月25日記